

国立東京療養所 寿康館日本間にて

助け主

――ヨハネ伝第13章36節～14章17節――

1959年5月30日

小池辰雄

罪の悲哀 THE WAY 群盲 砕けの決意 御霊の助け主

【ヨハネ伝13・36～14・17】

36 シモン・ペテロ言う『主よ、何処にゆき給うか』イエス答え給う『わが行く処に、なんじ今は従うこと能わず。されど後に従わん』³⁷ペテロ言う『主よ、いま従うこと能わぬは何故ぞ、我は汝のために生命を棄てん』³⁸イエス答え給う『なんじ我がために生命を棄つるか、誠にまことに汝に告ぐ、なんじ三度われを否むまでは、鶏鳴かざるべし』

¹『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。²わが父の家には住処^{すみか}おおし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われ汝等のために処^{ところ}を備えに往く。³もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。⁴汝らは我が往くところに至る道を知る』⁵トマス言う『主よ、何処にゆき給うかを知らず、いかでその道を知らんや』⁶イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。⁷汝等もし我を知りたらば、我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』⁸ピロポ言う『主よ、父を我らに示し給え、さらば足れり』⁹イエス言い給う『ピロポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。¹⁰我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等という言は、己によりて語るにあらず、父われに在^{いま}して御業をおこない給うなり。¹¹わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。¹²誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。¹³汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。¹⁴何事にて我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。¹⁵汝等もし我を愛せば、我が誠命^{いましめ}を守らん。¹⁶われ父に請わん、父は他に助主^{たすけぬし}をあたえて、永



遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。¹⁷これは真理の御霊^{みたま}なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。

●罪の悲哀

³⁶シモン・ペテロ言う『主よ、何処にゆき給うか』イエス答え給う『わが往く処に、なんじ今は従うこと能わず。されど後に従わん』

「主よ、何処にゆき給うか」

は「クオバデス・ドミネ」という有名な言葉です。「後に」とイエスが言われたのは、「御霊がおまえのところに来て宿るようになったら、従うことができるが、それまではだめだよ」

と言われた。

ペテロ言う『主よ、何処にゆき給うか』

このペテロという人は直情径行にものを言う人で、人間らしい決心をもって言った。よく、

「信仰は決意、決断だ」

と申します。ある意味において一面の真理はもっています。

「理解ではない。決意、決断しなくては信仰の世界ではダメである」

と。けれども、

³⁷ペテロ言う『主よ、いま従うこと能わぬは何故ぞ、我は汝のために生命を

棄てん』

と言う。一番弟子のペテロの念願、気合はまことによみすべきことでありますが、イエスはよく人間の弱さを知っておられます。

⁸イエス答え給う『なんじ我がために生命を棄つるか、誠にまことに汝に告ぐ、

なんじ三度われを否^{いな}むまでは、鶏鳴かざるべし』

私たちは三度どころではない。何回もキリストを知らずして否んでいるか知れない。神・

キリストに対して

「否^{いな}」

と言うことが、「不義」ということ。

「然^{しか}り」

と言うのが「義」ということです。これが信仰です。「然り」と言わんとしても、「然り」と言えない情けなき、いたましが私たちの根源の罪の姿です。キリストはまことにそれを不憫^{ふびん}に思い、かわいそうに思われた。しかるがゆえに、イエスは十字架にかかり給うたので、誰もそこまで本当に挺身^{ていしん}して従うことはできない。



●THE WAY

1 『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。2 わが父の家には住処^{すみか}おとし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われ汝等のために処^{ところ}を備えに往く。3 もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。4 汝らは我が往くころに至る道を知る』

「とかく人間は心が騒ぎ、動揺はする。それはしかたがない。けれども、私に対してハイと言いなさい」

と。信仰の世界では、

「わからないけれども、従ってみよう」

といって、自分が実践的に従うことが大切です。

「我を愛せよ」

というのと、

「我に従え」

ということと同じことです。そういう言葉が表現している事態をいつも私たちは一本に一如に捉えていくことが大切です。細かな分析はいらない。そこからいろんなことがわかってくる。それでは、

「聖霊がくるまではどうにもならない」

といって、手をこまねいていたなら、これはまたどうにもならない。あるときには決意でも盲目的にでもいいです。人間の現実というものは、一律の方程式で解剖できるような世界ではないのですから。

ゲーテのあの『ファウスト』の中に、

「常に努力、精進する者、これを私たち天使は助けるのだ」

という句があります。たしかに大きな真理を含んでいる。努力、精進そのものは何も天界に行くものではないですが、人間の側に

「求めよ、叩けよ、尋ねよ」

と、キリストの言われたこの渇きがなければ、どうにもならない。神さまも、人間が反抗したり疑ったりしているようなときは、しばらく放っておく。けれども、苦しんだり求めたりして、何か暗中模索をしている魂には、次第に光を与えてくださる。

5 トマス言う『主よ、何処にゆき給うかを知らず、いかでその道を知らんや』

非常に大事な問答です。神探求ということは、いくら瞑想や思索やいろいろな書物を読んでもみましても、神は出てこない。

6 イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命^{いのち}なり、我に由らでは誰にても父の御許^{みもと}にいたる者なし。



福音書を伝えているこの筆は、

「アブラハムの生まれいでぬ前より我は在るなり」(ヨハネ8・58)

という。この御霊のイエス・キリストが旧約から新約を貫いて一貫している。だから、聖書は絶対に崩れない。福音書におけるキリストの御姿は素晴らしく、そのまま映っているのです。キリストは、

「ただ一つの道」

なのです。これは定冠詞が付いています。「く・ホドス」「The Way」なのです。

「私は道というただ一つの道 (The Way) である。私はただ一つの真理 (The Truth) である。私はただ一つの生命 (The Life) である」

これは定冠詞が付いているから、非常に大事な表現です。

●群盲

7 汝等もし我を知りたらば、我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』

父が父であり、神が神であり給うこと、父神、霊神であり給うことは、イエスを通して初めて最も明らかに示し給うたのです。父の栄光は、なるほど天然自然の中にもある。また人類のいろんな歴史の中にもある。そのことはパウロもロマ書の中にて語っている。けれども、神を本当に顕したものは、ナザレのイエス・キリストの他に、天上天下東西古今いずにもないのです。

聖書のかなめは福音書です。イザヤ書がいかにも旧約聖書の中の偉大な書といっても、ロマ書、黙示録がいかにも新約聖書で大事な書といえども、この福音書におけるイエスそのものが伝え語り実存しておられるところのものと違います。パウロがいかに素晴らしくても、これはやはりキリストについて告白しているのですから、皆さんも、どうか福音書に死に至るまで、深く親しんでください。

ここに花がある。この花のことをいくら説明しても、現にこの花をじかじかに見ている現実とはやはり違う。この福音書というものは、現に私たちがじかじかに神の姿を見ている世界です。

8 ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、さらば足れり』。イエス言い給う『ピ

リポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を

見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。

福音書の素晴らしきというものは、これにいいよ驚嘆したならば、病院にいいようが、寝床に寝たつきりでいいようが、この素晴らしいものを告白できなくてはならない。それが告白できるためには、福音書を見る目、聞く耳、触れる手をいただかなくてはならない。その目、耳、手というのは御霊が私たちにくださるところの事態であります。御霊のキリスト者に



ならないうちは、いくら読めども読めない。声を聞けども聞こえない。触れても触れない。その証拠には、キリストとこの問答をしている連中、病をいやされたり、いろいろしていただいて救われているはずの連中、また、いわんやパリサイ人^{びと}たち、弟子たちですらも見えない。まことに地上のキリスト・イエスに出会っていないながら、なお、キリストが見えない。だからキリストは、

「耳ある者は聞くべし、目ある者は見るべし」

と言われた。

●砕けの決意

イエスご自身が砕け、そのものです。無、そのものです。仏教的な無の悟りとは違います。実存的な無というものは、今度は驚くべきプラスの無限の力がくる。そこに福音の世界の桁違いの素晴らしい内容がある。福音の把握の仕方において仏教的な、おのれを投げ出しているような、己の側を本当に空無にして行くような在り方は、いわゆる西洋流の学問の理解の角度よりもはるかに福音の世界に近いし、その態度を教えるから、私は仏教のものを読んで非常に参考になる。仏教の世界で彼らは素晴らしい。いわんや、全能の創造主なる神さまでですから、内容が桁違いになつてくるわけです。この仏教的な前段階に福音が入ってくると、福音が最も素晴らしい意味の正しい展開をすると思うのです。西洋流の神学的な理解からではダメです。

10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等にいう言は、己によりて語るにあらず、父われに在^{いま}して御業^{みわざ}をおこない給うなり。11 わが言うことを信ぜよ、我は父にあり、父は我に居給うなり。もし信ぜずば、我が業^{わざ}によりて信ぜよ。

このだめな私たちは、どんなに破れても、曇つても、ゆがんでいまして、もともと神の似姿につくられているのです。信じると信じないとかかわらず、みなこれ神の子です。問題は豁然としてそのことに気がつくことです。本来そのようなものであった。山川草木ことごとく仏性^{ぶつしょう}を持つている。いわんや人の子においてをやと。

主イエスというお方は、それ自身が神の現象^{にすがた}体です。彼の言、彼の業は、その現象体から発生したものです。私たちも神の似像^{にすがた}としてこのような現象体であるはずのものなのです。

12 誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。13 汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為^なさん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。14 何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。15 汝等もし我を愛せば、我が誠命^{いましめ}を守らん。



さきほどのペテロの決意は

「自分がしよう」

とする決意です。けれども、自分を投ずる決意、自己の自信のない投入、これはできるのです。

「私はそれをやってみる」

とか、ということだったらずダメになる。自己の側に自信のない、それゆえにその道、真理、生命の中に自分を捨ててかかるところの、この意志を神さまは喜び給う。砕けの意志とでもいいいますか、これは限りなく祝福されていきます。この角度が御霊を受ける角度なのです。この逆説的転換が非常に大事です。ここに御霊が臨んでくる契機がある。また祈りがその姿です。

●御霊の助け主

16 われ父に請わん、父は他^{たすけぬし}に助主^{たすけぬし}をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。

この「助主」は、

「人をささえ助けるために呼び寄せられたる者」

という意味です。本当に日本語の「助け主」と同じ言葉です。また「慰め主」という訳があります。「慰める」という意味はもちろんありますが、ただそんな狭い意味だけではありません。もつと広い意味にとつていい。言葉の方からいうと、

「代言者、代弁者、そのかたわに立つてこれを助ける者」

これが助け主です。クリスチャンとはこの助け主が宿つてくださなければクリスチャンではない。クリスチャンらしい者であつてもクリスト者ではない。クリスト者とは「御霊の人」という意味です（ロマ8・9、ヨハネ一書2・1参照）。

17 これは真理の御霊^{みたま}なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。

霊の世界はいろいろです。私たちはどこまでも、主イエス・キリストにおいて現わし給いし御霊、このキリストと一つにならんとの念願において御霊の世界に入れる。

ただ十字架というものを、

「これは罪の贖いである」

という命題にしてみているのでは、どうにもしようがない。

キリストは海の上を渡つてこられた。ペテロはそれに向かつて行つた。始めは幽霊かと思つたが、

「あなたでしたか!」



と言って歩いた。ところが、風を見て恐れた。まだ本当の御霊の事態にないから、ちょうど波みたいな人でしたが。私たちはこうやって畳の上を歩いているけれども、実はキリストの御霊によって海の上を渡っているような事態なのです。根源的にはそのような在り方をさせられているのであるという、この自覚にすれば、何も火の上を渡ったり、水の上を渡ったりする必要はない。私たちの実存が実にそのような、キリストにおいて動かされているような在り方、そういう御霊の在り方こそが、本当に信じているということなのです。

御霊の人は本当に現在を持っている人です。本当の現在を持っている人は、本当の永遠を持ち、終末の新天地をすでに身のうちに体している人です。

「神さまの国は私の中に投影されています」

と答えられる。

聖書は日本語でたくさんです。註解書も何もいらない。ということとは、勉強するなということではないですが。しかし、あなた方は本当に聖書一卷を聖書一卷として、これを枕として昼も夜も、という人になれば、皆さん一人ひとりとは真に御霊の伝道者になれます。神さまの御霊に捉えられて、その証人であるという自覚を真に持っていたきたいと私は願う。この御霊の証人である自覚がなかったならば、信仰生活だなんて言ったって、それは五十歩百歩です。

キリストという助け主は、私たちを通して人々を助けさせ給うところの、力ある愛の助け主です。だから、パウロもペテロもヨハネもヤコブも、みな助け主の人となりました。どうか、そういう意味におきましても、私たちも愛の助け主をいただいて、その証人として生きたいと思います。

（『愛泉』誌第23号、1959年6月26日発行より転載）

